琉球の開闢（かいびゃく）神話

琉球の開闢（かいびゃく）神話には諸説ありますが、最も有名な伝説は、アマミキヨという神が、ニライカナイ（神の世界）から降り立ち国づくりを始めたというものです。アマミキヨは島々をつくり、一組の男女を住まわせ、二人の間からは三男二女が生まれました。その舞台とされているのが県南部に位置する久高島。アマミキヨは七御嶽（うたき）を作ったとされます。御嶽とは神が訪れる、あるいは先祖神を祀る場所。島の中央の西側にその一つであるクボー御嶽があり、久高島第一の聖域といわれています。

久高島の中ほどにあるイシキ浜には、五穀が入った壷が流れてきて、それから久高島、沖縄本島へと穀物が広まったとされる伝説があります。この浜は、今もニライカナイに面する聖地となっており、ここから祈りを捧げる祭祀の場となっています。

久高島以外にも、神が降臨したと言われる場所があります。浜比嘉島は、ニライカナイから、アマミキヨとシネリキヨという男女神が降りてきたと伝わる「神の住む島」です。アマミキヨとシネリキヨは、古事記のイザナギとイザナミにあたるといわれます。二神は子を授かって洞窟に暮らしました。その子孫が人間として繁栄したのです。洞窟はシルミチュー霊場として祀られていますが、神話にあやかり、子宝を望む参拝客が訪れています。

平安時代（10 世紀頃）までの長い間、狩猟採取の生活が続いてきた沖縄ですが、12 世紀には農耕社会となり、15 世紀に入り当時の三つの勢力が統一され（三山統一）、琉球王朝が興りました。琉球は海洋国家としての発展を遂げていきます。中国をはじめ、東アジアや東南アジア、朝鮮、日本にいたる周辺諸国と積極的に交易をおこない、「大交易時代」とよばれる時代を築きました。その後、琉球は、1609 年の薩摩藩の武力侵攻により、内実は支配下に置かれることになりますが、諸外国との交易は続き、江戸時代の日本や中国の文化を吸収しながら、独自の琉球文化を形成していきます。

1879 年、明治維新の余波を受けた琉球王朝は、最後の王・尚泰（しょうたい）の代で幕を閉じ、沖縄県となりました。戦後は米軍の統治下に置かれるなど、複雑な歴史を歩んできました。その複雑かつ豊かな歴史が残した文化は、現在の沖縄の中に見ることができます。

中でも最も代表的なスポットはなんといっても首里城。創建年代は不明ですが、三山統一後に第一尚氏によって王城として確立されたという記録があります。沖縄戦で焼失しましたが、一部が復元整備され、「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として世界遺産に登録されました。

また琉球神話の源である神、アマミキヨが創ったと伝えられている斎場御嶽もそのひとつ。6 つの神域があり、最高位の女性神官・聞得大君の即位式が行われた大庫理（うふぐーい）や、三庫理（さんぐーい）は見逃せません。

御嶽（うたき）

琉球の信仰における祭祀などを行う施設である。「腰当森（くさてぃむい）」、「拝み山」などともいう。

琉球王国（第二尚氏王朝）が制定した琉球の信仰における聖域の総称で、それ以前はさまざまな呼び名が各地方にあった。この呼称は主に沖縄本島とその周辺の島々で発声されるが、宮古地方では「すく」、八重山地方では「おん」と発声する（近年では「うたき」への傾倒がみられる）。

信仰上の位置

御嶽は琉球の神話の神が存在、あるいは来訪する場所であり、また祖先神を祀る場でもある。地域の祭祀においては中心となる施設であり、地域を守護する聖域として現在も多くの信仰を集めている。琉球の信仰では神に仕えるのは女性とされるため、王国時代は完全に男子禁制だった。現在でもその多くが一定区域までしか男性の進入を認めていない。

御嶽（国営沖縄記念公園）

御嶽の多くは森の空間や泉や川などで、島そのものであることもある。御嶽によっては空間の中心にイベあるいはイビ石という石碑があるが、これは本来は神が降臨する標識であり、厳密な意味でのご神体ではない（ご神体として扱われているところも多い）。宮古や八重山地方では、過去に実在したノロの墓を御嶽とし、そのノロを地域の守護神として祭っていることが多く見られる。

大きな御嶽では、「神あしゃぎ（神あしゃげ、神あさぎ）」と呼ばれる前庭や建物といった空間が設けられていることがある。これは信仰上、御嶽の神を歓待して歌ったり踊ったりするための空間である。語源は「神あしあげ（神が足をあげる場＝腰を下ろす場）」と考えられている。

鳥居が設置されている御嶽が散見されるが、これは明治維新から琉球処分以降の「皇民化政策」による神道施設化の結果であり、本来のものではない。沖縄本島では戦後、鳥居が撤去された御嶽も多いが、宮古や八重山地方の御嶽の多くには戦後もそのまま鳥居が残されている。

斎場御嶽の大庫理（ウフグーイ）

御嶽はもともと古代社会において集落があった場所と考える説が有力である。その証左として、御嶽の近くから遺骨が見つかる例が少なくない。これは、祖先崇拝であることに強く関係していると考えられる。また、多くの川や泉が御嶽もしくはそれと同格の扱いをされているが、これは保水力の乏しい琉球石灰岩からなる沖縄県周辺の土地性などから、古代社会では水源が神聖視されたためと考えられる。

グスクには拝所が存在するものも多いが、このことから、グスクは元々は御嶽を中心にした集落であったものが発展し、城砦化したと指摘する説がある。また、首里城、玉城城など、城そのものが御嶽とみなされていた城もある。

現代における実情

現代も琉球の信仰は地域に根付いており、御嶽はその信仰の中心となる施設として、地域に手厚く保護されているものも多いが、放棄され、存在自体不明のものもある。著名な斎場御嶽や園比屋武御嶽のように観光資源化している御嶽もあるが、それはどちらかといえば稀な例であり、多くの御嶽は、現在も地域の人々（女性）や、そこを管理するノロによって維持されている。御嶽はほぼ年間を通してたびたび行われる地域の様々な祭事の中心となるばかりでなく、東御廻りや今帰仁上りなどの巡礼地として崇められているものもある。

また、米軍による土地接収や、発掘調査や開発にともない立入が禁止または制限されたほか、破壊された御嶽もある。一例として、首里城敷地内にあった十御嶽のいくつかは、かつては現在の首里城再建以前には信仰者が来訪することができたが、同城の再建などの整備にともない立入の制限または有料観覧区域となったり、埋め立てられるなどした地域がある。

主な御嶽

以下に、信仰上重要かつ著名な御嶽を列挙する。なお、琉球王国時代の古い集落についてはおおむね集落ごとに 1 箇所以上の御嶽があると考えてよいが、当時から現在にわたって存在する集落の場合は御嶽もまた残っていると考えられることから、以下はごく一部の例示である。

琉球開闢七御嶽

琉球の神話では、日の大神（天にある最高神、日神、天帝）が開闢の神アマミキヨ（アマミク）に命じて島作りをさせた。アマミキヨはこの命を受け、沖縄本島を作り、そこに 9 つの聖地（出典「中山世鑑」）7 つの森（出典「聞得大君御規式の次第」）を作ったとされる。現在では、アマミキヨによって作られた聖地のうち 7 つが、琉球開闢七御嶽として語り継がれ、琉球の信仰においてもっとも神聖な御嶽として位置づけられている。

このうち王国の祭政一致体制において最重視された御嶽は、斎場御嶽である。聞得大君の就任式などはこの御嶽で行なわれた。現在の斎場御嶽からは、アマミキヨ降臨の聖地である久高島が遥拝できるが、これは王国時代の史料には記録されていない。また国王就任に際しては、君手摩（きみてずり）が安須森御嶽に現れ、5 つの御嶽を順に巡り、最後に首里真玉森御嶽に現れるという。

以下、アマミキヨが作ったとされる順番に列記する。

安須森御嶽（あすむぃうたき）：国頭村辺土

クボウ御嶽：今帰仁村今帰仁グスク内

斎場御嶽（せーふぁうたき）：南城市知念

薮薩御嶽（やぶさつうたき）：南城市玉城

雨つづ天つぎ御嶽（あまつづてんつぎうたき）：南城市玉城、玉城グスク内

クボー御嶽（くぼーうたき）：南城市知念（久高島）

首里真玉森御嶽（しゅいまだむいうたき）：首里城内

このうち、首里真玉森御嶽は沖縄戦と首里城改築工事による整備で失われており、県によって敷地内への侵入は禁止されている。

東御廻りの御嶽

園比屋武御嶽、石門の後方

現在も行われている聖地巡礼である東御廻り（あがりうまーい）は、太陽の昇る東方を、ニライカナイのある聖なる方角と考え、首里からみて太陽が昇る東方（あがりかた）といわれた玉城、知念、佐敷、大里にある御嶽を巡るものである。起源は国王の巡礼と考えられており、以後時代が下るに従い、士族、民間へと広まった。現在では、士族の流れを汲んでいる門中（むんちゅー：男系血族）を中心に行われている。巡る御嶽は門中によって多少異なるが、起点の園比屋武御嶽から以下の順に巡るのが一般的である。

園比屋武御嶽（すぬひゃんうたき）：首里城外

与那原親川（よなばるうぇーがー）：与那原町

御殿山（うどぅんやま）：与那原町

場天御嶽（ばてぃんうたき）：南城市佐敷

佐敷上グスク（さしきうぃぐすく）：南城市佐敷

テダ御川（てぃだうかー）：南城市知念

斎場御嶽（せーふぁうたき）：南城市知念

友利ノ御嶽（とむいのたけ）：南城市知念知念グスク内

知念大川（ちねんうっかー）：南城市知念

ミントングスク（みんとぅんぐすく）：南城市玉城

仲村渠樋川（なかんだかりひーじゃー）：南城市玉城

アイハンタ御嶽（あいはんたうたき）：南城市玉城

藪薩御嶽（やぶさつうたき）：南城市玉城

ヤハラヅカサ：南城市玉城

潮花司（すーぱなつかさ）：南城市玉城

浜川御嶽（はまがーうたき）：南城市玉城

浜川受水走水（はまがーうきんじゅはいんじゅ）：南城市玉城

雨つづ天つぎ御嶽（あまつづてんつぎうたき）：南城市玉城玉城グスク内

玉城祝女殿内（たまぐすくぬんどぅち）：南城市玉城

志堅原仁川（しちんばるじんがー）：南城市玉城

今帰仁上りの御嶽

現在も門中を中心に、今帰仁一帯の聖地を巡礼するものが今帰仁上り（なきじんぬぶい）である。起源は定かではないが、琉球王国王統発祥の地である伊是名島、伊平屋島を擁する旧北山国領と、その首府があった今帰仁には、士族のルーツも多くあることが理由ではないかと考えられる。巡る御嶽や経路は門中によって多少異なる。主な御嶽は以下の通りである。

カラウカー：今帰仁グスク内

火の神の祠：今帰仁グスク内

テンチギの御嶽（カナヒヤブ。開闢 2 番目に作られた御嶽）：今帰仁グスク内

ソイツギの御嶽：今帰仁グスク内

クボウ御嶽：今帰仁グスク内

阿応理屋恵祝女殿内（あおりやへのろどぅんち）：今帰仁村

今帰仁祝女殿内（なきじんのろどぅんち）：今帰仁村

供のカネー祝女火の神（とぅむなはーにーのろひぬかん）：今帰仁村

今泊の親川（えーがー）：今帰仁村

中城（仲尾次）祝女殿内（なかぐすくのろどぅんち）：今帰仁村

今泊の津屋口墓（ちぇーぐちばか）：今帰仁村

諸志の赤御墓（あかうばか）：今帰仁村

池城墓（いちぐすくばか）：今帰仁村

大北墓（うーにしばか：または按司御墓/あじうはか）：今帰仁村

百按司墓（むむじゃなばか）：今帰仁村

ティラガマ：今帰仁村

勢理客祝女殿内（じっちゃくのろどぅんち）：今帰仁村

先島諸島の御嶽

先島諸島には王国の支配を受ける以前からの聖地が多くあるほか、八重山列島では司の墓が御嶽となっている例が多く見られる。八重山列島では御嶽のことを「おん」、「わん」と呼ぶ。以下に主なものを列挙する。

宮古諸島

漲水御嶽（ぴゃるみずうたき、はりみずうたき）

宮古島（宮古島市）。宮古島を作った神・古意角（こいつの）と姑依玉（こいたま）の二神を中心として、水を司る「竜宮神」、宮古島を守護する「子方母天太」等の神々が祭られており、島内最高の霊場として島の人々の信仰を集め、その周りをめぐる石垣は、1500 年のオヤケ赤蜂の乱の戦勝記念として仲宗根豊見親が奉納したと伝えられている。

島尻元島（しまじりもとしま）

宮古島（宮古島市平良字島尻）。奇祭「パーントゥ・プナハ」の中心となる一帯にある。

大主御嶽（ウパルズ御嶽、ナナムイ）

池間島（宮古島市）。大主神社（標準語風の名称）ともいう。宮古島に住んでいる人々の運命を司る神「うらせりくためなうの眞主（まぬす）」を祭る御嶽。池間島から移民した人々が伊良部島、字西原にも新しく同名の御嶽を建立した。現在でも池間島にルーツがある人々から信仰を集め、この御嶽を中心として、多くの神事が行われている。

大神御嶽（おおがみうたき）

大神島（宮古島市）。秘祭「祖神祭（うやがん）」の中心となる御嶽。

八重山列島

真乙姥御嶽（まいつばおん）

石垣島（石垣市）。王府のオヤケアカハチ軍征討に縁のある祝女を祭った御嶽。

美崎御嶽（みしゃぎおん）

石垣島（石垣市）。沖縄県の有形文化財・史跡に指定されている。

群星御嶽（んにぶしおん/んにぶしうたき）

石垣島（石垣市）。奇祭「マユンガナシ」の中心になる御嶽。

西塘御嶽（にしとうおん）

竹富島（竹富町）。西塘を祀る御嶽。沖縄県の史跡に指定されている。

国仲御嶽（ふいなーおん/くになかうたき）

竹富島（竹富町）。園比屋武御嶽から勧請された八重山で唯一の王府縁の御嶽。

三離御嶽（ふなふら/みちゃーりおん/さんりうたき）

西表島（竹富町古見（クン））。請原御嶽とともに、秘祭アカマタ・クロマタ・シロマタ祭の中心になる御嶽。

十山御嶽（とぅやまうがん）

与那国島（与那国町祖納）。

奄美群島

奄美群島にもノロ制度はあるが御嶽は確認されない。ただし「アマンデー」（奄美嶽、海見嶽）と呼ばれる、斎場御嶽と似たものが存在する。また「拝み山」と呼ばれる山や、「立神」と呼ばれる類するものもある。